

第 16 回(2009. 6. 6 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「6 月は時の記念日」

6 月 10 日は「時の記念日」である。その起源は、天智天皇(てんじてんのう、第 38 代天皇、在位 668～672)の時代に水時計が設置されて、宮中に時を知らせる制度が出来たが、これを基に大正 9 年(1920)に時の記念日が制定された。わが国の水時計は、『日本書紀』によれば、齊明天皇(女帝、第 37 代天皇、第 35 代皇極天皇)の時代、天智天皇がまだ中大兄皇子といわれた皇太子のころ、皇子の命によって設置したというのが、記録がはっきりしているのは天智天皇 10 年 4 月 25 日である。この日を太陽暦に換算すると、西暦 671 年 6 月 10 日となり、そこで 6 月 10 日を「時の記念日」としたものである。

古代から時を計るには「日時計」や「星時計」が用いられてきた。日時計は、春分、秋分や夏至、冬至などを知ることができ、太陽の運行が示すカレンダー的な役割を持っていたため、古くから天文学には無くてはならないものだったので、世界の各地にその遺構が残っている。ちなみに、世界的にも有名なイギリスのストーンサークル(ストーンヘンジ、環状列石)という巨大な石の構造物は、先史時代の祭祀場だともいわれているが、日本では主に東北、北海道に縄文時代中期の環状列石が発見されており、ここには日時計状の組み石があり、古くから天体観測が行われていたことを示している。

日時計や星時計は、雲がかかって太陽や星が見えなくなる日もあり、水のしたたりや流入、流出で時間を計る水時計がより正確で実用的だったと思われる。世界で最初に文明が発祥したメソポタミアにおいて、古バビロニア(BC2000～BC1600)時代にはすでに水時計が使われていたことが、当時の粘土板に書かれた記録が発見されてわかっている。日本では、昭和 56 年(1981)に奈良県の明日香村で、水時計の施設の基礎が発掘された。当時は水時計を漏刻(ろうこく)と呼んで、陰陽師(おんみょうじ)が 24 時間管理して、太鼓や鉦で時を知らせたという。

陰陽師とは、古代日本の朝廷における天皇政治に関するあらゆることに吉凶あるいは災害予想などをする者たちである。陰陽師は、遷都などの重要な行事における土地を選び、その吉凶の判断や、占星術をもって作物の豊作不作を占い、豊作祈願祭などを判断することなど、また星、月、雲、風などの大気を常に観察して、変化する意味を占い報告する人たちであった。陰陽師で最も有名な人は、安倍晴明(あべのせいめい、921～1005)で、卓越した知識を持っていたため、数多くの逸話を残しており、そのため母親は白狐だったのではないかと噂されたという。

陰陽道とは、今でいう天文学、生物学、物理学あるいは医学などで、古代中国における易学からきている。唐に学んだ吉備真備(きびのまきび 695～775)が、中国から持ち帰った陰陽道を広めたものといわれているが、万物を陽と陰に二分して、その陽と陰とが合体したり離反したり、あるいはお互いに作用したりしながら、万物の生成・消滅など森羅万象を起すと考えられていた。この考え方が、自然や人間社会のいろいろな現象を説明し、また未来の予測を行うように発展し、災難を避ける工夫を考えるようになった。陽は動的なもの、陰は静的なものとされているが、これらはおかれている状況により変化すると考えられていた。これが陰陽道の基本的な考えだが、そこで自然や人間社会など万物の生成・消滅などの現象は、すべて「五つの気」が循環することによって変化するという考えが五行説である。この五行説については、「2 月は節分」のところで説明したが、陰陽道と組み合わせて陰陽道五行説という。この陰陽道五行説は、現在でも風水など日常生活に結びついているものがたくさんある。

中国の宣明暦(せんみょうれき)を基に作られた古代日本の暦では、1日(24時間)を12分割して干支の名前を付けた。子(ね)から始まるこの暦では、子は0時から2時までではなく、11時から1時までの2時間だった。その2時間を一時(いっとき)と呼んだ。時代劇や時代小説などで、よく一刻(いっとき)とか半刻(はんとき)などというが、それはこれによる。夜の2時間は寝ているからいいのだが、昼間の2時間単位は長すぎるので、「初刻」と「正刻」とに呼び分けた。だから、午(うま)の刻(昼の11時から1時)の正刻(12時から1時)を「正午」といい、正午の前を「午前」、正午の後を「午後」と呼んだ。また、「草木も眠る丑三つ時」などというのは、平安時代には一刻を4等分して30分単位で表したから、丑三つ時は丑の刻(午前1時~3時)の第三時(2時~2時半)のことである。

これとは別に、「おやつ」の語源となった八つは、宮中では時間を太鼓の音の数で知らせていたが、子が九つ、丑が八つ、寅が七つ、卯が六つ、辰が五つ、巳が四つ、そしてなぜか午が再び九つに戻って太鼓を打つ。だから、言葉では「子の九つ」は真夜中、ただの「九つ」は昼と使い分けただようである。

ところで、「おやつ」だが、八つは丑だから午後1時から3時である。大昔は一日2食だったので、そのころになるとお腹が空く。「午前のおやつ」や「午後のおやつ」などというのは、昔の食いしん坊が苦心の末に考えたことなのである。現代では、夜食なるものを合わせれば、なんと日本人は1日に6食の生活だ。これでは肥満児が増えるのは無理もないことである。現在の日本は24時間営業の店が数多くあり、夜中に若者が街に満ちあふれているから、丑三つ時などという言葉は、もう死語になってしまった。世の中全体が狂ってきたのだ。だから、気が狂って(今さら改めて諸君が狂うのではない、五行説の気のことである)もうじき人類は消滅してしまうに違いない。

格言に「時は金なり」とあるが、雲竹斎自身はお金に縁がないので実感が沸かない。しかし、生来短気なので「待つ」というのは我慢ができない。どこそこのラーメンが美味いからといって、何十分もあるいは何時間も並んでいる人を見ると、気は確かなのか、と疑いたくなる。「時は金なり」の格言は、まさにこの人たちのためにあるのだと思っている。

ある調査機関がアンケートを採ったところ、人気の飲食店での待ち時間が30分以上でもいいという人は、全体の80%以上だったそうである。そのくせに、スーパーなどのレジ待ちが2分を過ぎれば半数以上がイライラするというし、電車の遅れや金融機関のATMは5分もすれば、大部分が我慢できないという。おもしろいのは、恋人との待ち合わせで、屋内では30分以内で男性70%、女性60%がイライラしはじめるが、屋外では20分以内で男性が50%に対し女性が60%という結果が出ている。これは、屋内では男性が「振られたのではないか」と不安になるからで、また、屋外では、女性は他人からの視線を気にして、恋人から待たされていることに自尊心が傷つけられるからだろうか。いずれにしても、恋人とも待ち合わせよりも、食べ物を待っている方が我慢できるという結果は、いかに人間は食い意地がはっているかを証明している。それにしても、雲竹斎は、たかだかラーメン一杯のために、バカ面して何十分も並んで待っている気にはなれないが、もし若い女性がつきあってくれるなら、あんパンでも嚙って、30分でも1時間でも待っている。